

中山間地域における促成イチゴの2年株を利用した長期採り栽培					
<p>[要約] 中山間地域促成イチゴの長期採り栽培で、収穫終了後の株の2年株としての利用が可能である。2年株は育苗の作業時間が半分以下に省力でき、乱形果の発生が少なく、また芽数が少ないほど収量は多く、果実も大きくなるので、1芽が適する。</p>					
担当部署	八女分場・中山間地作物研究室			連絡先	0943-42-0292
対象作目	野菜	専門項目	育苗	成果分類	新技術

[背景・ねらい]

中山間地において促成イチゴの収益を向上させるためには、平坦地に比べて冷涼な6～7月まで収穫期を延長し、収量を増やすことが一つの方法である。長期採り栽培については、果実の品質の面から高設栽培が適し、平畝栽培の場合は、黒マルチ上に遮熱資材を敷設すると果実品質が向上することなどを明らかにした（平成12年度研究成果情報）。しかし、収穫期を延長した圃場の管理と次作の育苗との労力が競合する。

そこで、長期採り栽培において、収穫終了した株を引き続き次作の苗として利用する方法（2年株の利用）を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 2年株は前作の株を利用するので、親株や生産用苗の養成および定植作業などを必要とせず、育苗の作業時間（10a当たり）を120時間と慣行の半分以下に省力化できる（図1、表1）。
2. 2年株を利用する場合、芽数が多いと小玉果の発生が多くなり、収量が低下する傾向にあるので、芽数は1つにする（図2、表2）。
3. 2年株の利用で、乱形果の発生を減少させることができる（表2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 野菜栽培技術指針に登載し、促成イチゴの高設栽培における省力的な苗管理技術として活用できる。
2. 2年株は、花芽分化を確認するまで、または9月中旬までかん水のみとする。また、クラウン部が地上に露出し易いため株元へ培地を加える。
3. 2年株は、過繁茂により灰色かび病などが発生しやすくなるため、腋芽は早めに摘除する。また、収穫終了直後に剪葉すると、病害虫の防除が容易となり、その後の発生も少ない。

[具体的データ]

作付け体系	月	9	10	11	12	7	8	9	10	11	12	7	
慣行 (当年苗)	1年目	—————				~~~~~							
	2年目				-----	-----	-----	-----	-----	-----	~~~~~		
2年株 利用	1年目	—————				~~~~~							
	2年目 (2年株の利用)					—	—	—	—	—	~~~~~		

図1 促成長期採り栽培における2年株利用の作付け体系と慣行体系との比較

注) : 親苗定植、 : 採苗、 : 生産用苗定植、 : 収穫、 : 2年株に移行、 : 芽数整理

表1 当年養成した苗(当年苗:慣行)と2年株における育苗の労働内容と作業時間の比較(概算)

苗の種類	労働内容と作業時間		合計時間
	11~4月	5~9月(定植まで)	
当年苗	親株の定植および管理	苗の管理、定植など	292hr
作業時間:	38hr	254hr(棚式育苗の場合)	
2年株	生産株の再利用のため、特になし。	苗の管理(葉かぎを適宜実施し、芽数も整理する場合)	120hr
作業時間:	0hr	120hr	

注) 労働内容および作業時間は「経営類型(平成11年農業技術課調べ)」を参照した。

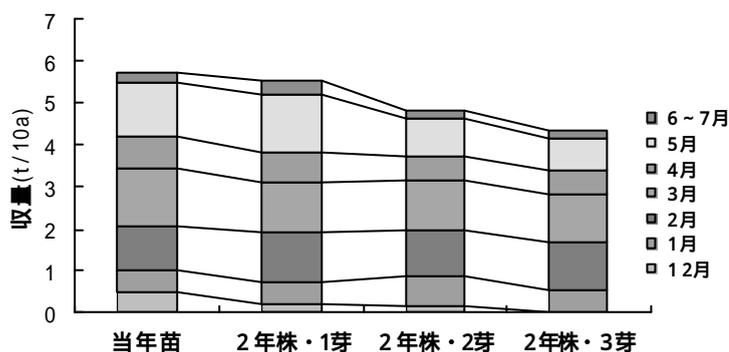


図2 月別収量に対する2年株およびその芽数の影響(平成12年)

注) 1. 品種: とよのか

2. 栽培方法: オープンハウス、高設栽培

表2 重さ別果実と乱形果の発生に対する2年株およびその芽数の影響(平成12年)

苗の種類	重さ別果実の発生割合(%)				平均果重 (g)	乱形果の 発生率(%)
	15g以上	10~15g未満	6~10g未満	6g未満		
当年苗	30.4	25.5	28.2	15.9	12.5	7.4
2年株・1芽	26.4	28.1	28.0	17.5	11.7	2.2
2年株・2芽	19.0	27.0	34.5	19.5	10.3	2.7
2年株・3芽	18.2	26.1	31.3	24.4	9.9	2.4

[その他]

研究課題名: 省力的な促成長期どり栽培技術の確立

予算区分: 県特

研究期間: 平成13年度(平成12~13年)

研究担当者: 柴戸靖志、林 三徳、月時和隆